



CASE

# 1 富士市立高等学校

**DATA**  
 【学 科】総合探究科・ビジネス探究科・スポーツ探究科  
 【創 立】1962年  
 【生 徒 数】704人(男子281人・女子423人)  
 【進路状況】四年制大学90人、短大20人、専門学校63人、就職43人、その他1人(2014年度実績)

## 校訓「考えよ」を実践する「探究心」の育成 富士市立高校の課題解決型学習

### コンセプトはC・D・I

2011年、富士市立高校は商業科単独の吉原商業高校から3つの学科を持つ総合型専門高校へ改編され、新たな出発の途についた。商業高校を卒業して事務職に就職という構図が崩れて久しく、商業高校としての存在意義をどこに見いだすかが問われるようになっていく。当時の吉原商業高校もその例に漏れず、学習内容と進路とのミスマッチが顕著な状況に陥っていた中での改組である。生徒、保護者、中学校教員、その誰に対しても魅力的な高校に再編せねばならない。そこで、学校のコンセプトを考えるという根本からの検討が始まった。2005年度からの検討の結果、2008年度にC・D・Iという3つのコンセプトが定まった(図表1)。Cはコミュニティハイスクール、県立ではなく市立高校であるため、より

図表1 富士市立高校のコンセプト

郷土愛を胸に、夢の実現にチャレンジし、  
様々な世界で活躍する若者の育成

<b>C</b> community	コミュニティハイスクール	地域、学校との連携を回り「自律する若者」を育てる高校
<b>D</b> dream	ドリカムハイスクール	夢を持ち続け、生涯にわたって学び続ける力をはぐくむ夢実現高校 ※ Dreams come true (夢実現)の略
<b>I</b> inquiry	探究ハイスクール	物事の本質を追求し、自分自身と向き合い向上心と探究心に満ちた高校

密接に地域との連携が可能である。Dはドリカムハイスクール、生徒達には夢を持ち、その夢を実現すべく学んでほしい。Iは探究(Inquiry)ハイスクール、これからの時代を生きるうえで、探究心は不可欠な力である。

校訓は「考えよ」であり、探究心の育成というコンセプトは校訓の具現化である。このコンセプトをいかにしてカリキュラムとして編成するか、それが次の、そして最大の課題であり、2009～2010年度にその検討が行われた。探究心は受け身では身につかない。生徒自らが問いを立て、考え、答えを導く、そうした姿勢での学習が繰り返される必要がある。そのためには、課題解決型の授業とするのが良いということまでは、比較的容易に到達する。問題は、それを授業の内容・方法に具体的に落とし込んでいく作業である。課題解決型学習で有名な高校の事例はあるものの、それをそのまま導入しても効果はない。なぜなら、この高校への入学者の特性を考慮してこそ効果があがるからである。高校の再編計画に当初から関わってきた眺野大輔指導主事(取材当時)は、当時を振り返ってこの過程が大変だったが、とても重要なプロセスだったと語られる。

### 3年間に課題解決型学習を5回繰り返す「究タイム」

新高校の3つの学科には、総合探究科、ビジネス探究科、スポーツ探究科といずれも「探究」がついており、学校全体として探究心の育成を掲げている。それを形にしたのが、3学科共通、週2時間の総合的な学習の時間に行う課題解決型

図表2 課題解決型学習「究タイム」の流れ

3年次 探究Ⅱ	第5 単元	<b>夢</b> 夢探究	3年次は、ここまでの学習を振り返ることで、気づきや自らの成長を自覚し、将来との繋がりを意識したスピーチの作成を通して、進路意識を高める。	
	第4 単元	<b>究</b> テーマ研究	2年次の後半は、これまで身につけた力を活用して、自分自身で設定したテーマを探究することで、社会問題や自分の将来について視野を広げる。	
2年次 探究Ⅰ	第3 単元	<b>活</b> 地域研究	2年次の前半は、富士市の抱える課題に向き合い、解決策を検討し、プレゼンテーションすることで、地域の一員としての意識を高める。	
	第2 単元	<b>論</b> ディベート	1年次の後半は、ディベートにチームで取り組むことで、多角的な見方や論理的な考え方を学び、コミュニケーション力や協働力を高める。	
1年次 探究基礎	第1 単元	<b>序</b> スキル取得	1年次の前半は、ブレインストーミング、KJ法等、課題を見つけ、情報を集め、まとめて、表現するための基本的な方法を学ぶ。	

学習で、「究タイム」と命名された。半年を1単元とし、3年前期までの5単元から構成されている。半年のスパンで、異なるテーマと方法による課題解決型学習を5回繰り返すスパイラル構造になっている点に特徴がある(図表2)。

1年次の「序」ではブレインストーミングやKJ法を学び、「論」ではディベートを行い、2年次の「活」になると地域に出て具体的な課題の解決を行い、「究」ではこれまでの学習を総合して、自分で設定したテーマを探究してレポートを作成。3年前期の「夢」では高校生活を振り返り、3年間の成長と将来との繋がりを意識したスピーチを作成する。課題を解決するためのスキル・手順・表現の習得を、テーマを変えつつ2年半かけて徹底的に刷り込むのだという。

このカリキュラムには、いくつか工夫が凝らされている。とりわけ重要な2点に絞ってとりあげよう。第1は、どの単元においてもPDCAサイクルを回すために、発表の機会が複数回あり、その結果を受けて次へフィードバックする仕組みがあることだ。発表が単元の最後だけでは、生徒にとって指摘された問題点を解決する機会がない。しかし、中間発表等を入れることで、指摘を受けて改善を考える機会が生まれる。

次があるから、生徒は失敗を恐れずチャレンジするようになる。

第2は、学習の深度を増していくための工夫である。例えば、2年前期まではチームでの課題解決型学習であり、その後は個人のテーマにもとづく課題解決型学習になる。チームを4人としているのは、相互依存する構造を作らず、誰もが責任を持って考え、発表する機会を持つための工夫である。こうしたチーム学習を経て課題解決の方法を習得することで、個人としても自立的に学習ができるようになる。また、当初はブレインストーミングやディベート等音声での発表が主であるが、次第に文字での発表の比重が高くなっていく。まずは論理的思考を口頭発表として習得し、次第に文章表現とするための工夫である。また、課題解決型学習に不可欠なのが資料の収集である。1年の時には、書籍、新聞、ネット等

の既存の情報から資料を得ることが中心だが、2年になると地域に出て人から話を聞き、それを資料として利用することを学ぶ。人の話を資料とするのは、得たい情報が得られるか、情報の偏りが無いか等を考えねばならないため、既存資料の扱いよりは困難が伴う。これらも情報の特性や扱い方について理解を深めるための工夫である。

### 教材は地域・教師は地元の大人

2年前期の「活」は、課題解決型学習の実践編である。学校のコンセプトの1つである地域との連携の多くがここに集約している。「市役所プラン」と称されるフィールドワークであり、生徒は富士市役所の高校生職員として地域の課題解決に当たり、解決策の提案を行う。当初は、健康福祉課、環境課、防災危機管理課に分かれ、そこで与えられた課題を解決する方式をとっていたが、2015年度からは市内10地区のまちづくりセンターに出かけ、地区の町内会長等に話を聞き、各地区の課題を生徒自身が設定して具体的な解決策を考える方式に変更した。

それは、課題が与えられた場合、それが自分達にとっての

課題という自覚が弱く、提案された解決策も他者任せの感が強いものであったからである。その反省にもとづき、高校生ができることという視点で、町内会長等と一緒に地区の魅力や課題を探し、まちをより魅力的にするための提案を発信する方式に切り替えたのであった。

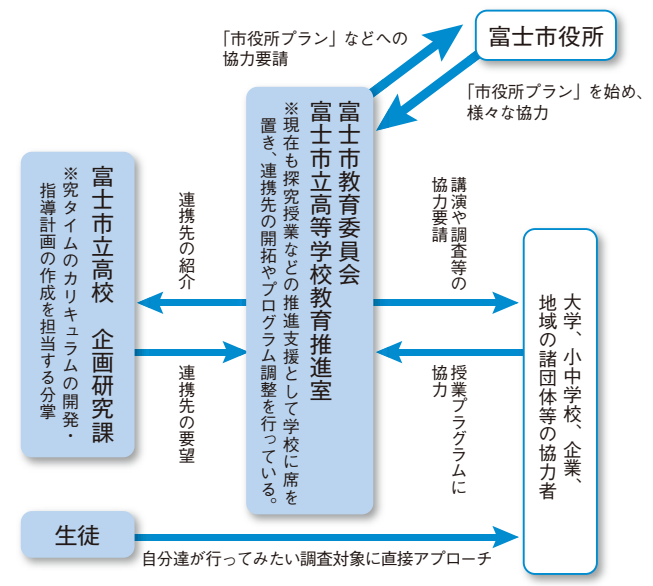
この変更は成功し、生徒はより能動的に学習に取り組むようになった。自ら課題を発見して行動するようになり、夏休みに自主的にフィールドワークを続けるグループもでてきた。提案も具体的になった。地震の際の避難方法を考える、市の防災施設を調査して不足する用品を発見する、地区の湧水マップづくり…といったように、生活に密着した課題に関する提案が多く出された。中には、地区の婦人部の方々の協力を得て、地区の梅まつりで販売するおまんじゅうを作ることで多世代のつながりを作り出すなど、当初は思いもよらなかった形で実現するものもあった。

図表3にあるように、地域との連携の体制は万全である。その中で、いかに生徒が自覚的に取り組むための仕掛けを作るかが、「活」を活性化させる鍵となる。課題は与えられるものではなく、自ら探すものなのだ。

**視野を広げ、学習の意義を深める大学や企業での研修**

探究心を育成するためには、高校卒業後の進路である大学や企業がどのような場であるかを高校の段階から知っておくことが重要である。そのことで、高校での学習の意義の

図表3 地域との連携方法



齊藤照安 校長 眺野大輔 指導主事

理解度も高まる。それが「究タイム」と並ぶもう1つの柱の、キャリア教育である。キャリア教育といえば各界で活躍する人の話を聞くといった講話型が多い中、この学校ではここでも課題解決型学習を取り入れており、学校のコネクトは貫徹している。

その代表的な2つが、各年次の夏季集中研修と、2年次の冬の海外探究研修である。学科のミッションによって、内容は異なっている。総合探究科の夏季集中研修は「研究実践」として、大学におけるワークショップ、フィールドワーク、ポスター発表等を行っている。その他、2年次には日本を訪れているハーバード大学の学生との英語キャンプがある。高校生5人、ハーバード大生1人のチームで、日本文化を紹介する英語でのプレゼンテーションを作り込む。この英語体験を経て、2年次の冬にはボストンでの海外探究研修が待っている。ハーバード大学では講義を聴講し、マサチューセッツ工科大学では工学ワークショップを体験する。それ以外にも、現地の高校生と1対1になって授業を受けるなど、盛りだくさんのプログラムである。

ビジネス探究科の夏季集中研修は「企業研究」である。ビジネス探究科の場合、就職する生徒の就職先は県内企業が多いが、グローバル化する経済に立ち向かう力をつけることを課題として、1年次は東京での日本を代表する企業での研修、2年次は冬の海外探究研修で台湾の企業等でマーケティング研修を行う。また、3年次の夏季集中研修で実施する、3人1グループで派遣先の企業のプロモーションをするインターンシップがユニークである。

スポーツ探究科の夏季集中研修は「野外活動」として、カーリング、キャンプ、富士登山と日頃経験するチャンスの少ない活動を校外で行う。海外探究研修では、スポーツを競技として捉えるだけでなく、スポーツ文化という視点で考えることを狙いとして、オランダとドイツを訪問しヨーロッパで盛んな地域のクラブスポーツで実習を行うことを主な目的としている。

単に見聞を広めるだけに終わることなく、夏季集中研修で

も海外探究研修でも、各種の課題解決的な活動を行うことで、自ら考え行動する訓練が常に組み込まれている。社会の様々な現実に関わるこのような探究は、ある意味、高校生にとってはサバイバルであり、必然的に自分自身で考えねばならない。高校卒業後の世界を見ることは、ドリカムハイスクールのコンセプトである生涯学び続ける意欲を喚起することになる。

**生徒、教員、そして地域の変化**

富士市立高校として出発して5年、卒業生を3回送り出した。さて、この間、課題解決型学習に力を入れることで、学校の何が変わったのだろうか。それについて、眺野指導主事は、「生徒が穏やかになりましたね。誰彼分け隔てなく議論ができるようになりました。それと廊下を歩く後姿、背筋がちゃんと伸びているのです」と語る。やや抽象的な表現ではあるが、学校の日常を知る者にとっては、すんなりと納得できる商業高校時代とは異なる確実な変化なのだろう。志願者は入学者定員を超えるようになった。この学校の教育に魅力を感じて入学する者が増加していることを示す。また、生徒に対するアンケートでも、「総合的な学習の時間は生きていくうえで大切なことを学んでいると思う」、「総合的な学習に一生懸命取り組んでいる」と回答する生徒の比率は、2013年70%台、2014年80%台、2015年90%台と毎年上昇している。

これは教員の授業改善の結果でもある。教員も変わったという。開始当初は、こうした課題解決型学習に懐疑的な教員が多く、なかなか賛同を得られない状況が続いた。その中担当者は、週に1回の打ち合わせを重ね、地道に継続することで、次第に周囲の理解が得られるようになったそうだ。教員の力量も向上したに違いない。なぜなら、既存の知識習得型の学習と違って、課題解決型学習は正解が1つではない。これは、多様なアイデアを論理のプロセスにのせ、ある結論へ収斂させる方式の学習であり、どのようにして論理のプロセスにのせるか、どのようにして当初は予想されなかった結論に収斂させるかは、まさに教員の力量に掛かっているからである。

地元の高校生を見る目も変化する。地域に出てきた高校生と接することで、高校生といえども意外な力があることを

知るようになる。「市役所プラン」の発表会には市役所や町内会役員が駆けつけてくれる。地域の活性化に若い世代が不可欠であるという認識は、着実に深まっている。

**育成した探究心を、いかに学力や進路に結びつけるか**

全てのことがうまく運んでいるかのようであるが、やはり課題は残っている。それは、このようにして育成した探究心を、卒業後の進路においてどのように評価してもらうかという課題である。確かに、就職に関しては公務員や地元の信用金庫等へ就職する者が徐々に増え、求人倍率も向上している。大学進学でもAOや推薦入試は比較的好調であり、探究学習を活かした進路指導の効果があがっているようだ。

しかしながら、一般入試は、探究心だけでは太刀打ちできず、教科の知識の習得による学力が必要になる。齊藤照安校長(取材当時)は、「学ぶ意欲が高まってきたことは明白です。現在、大学入試改革では学ぶ意欲の重要性や課題解決能力の重要性が議論されていますが、わが高校の課題解決型学習はそれに比べられるものと思っており、今後も力を入れていきたいと考えています」と話されつつ、他方で、「そうした力とともに、やはり教科型の学力の獲得が必要です。学ぶ意欲だけでは一般入試はパスできず、そこがわが校の1つのネックにもなっている。探究心と学力との両輪をいかにうまく回していくかが課題です」と語られる。

大学入学後に重要なのは、学ぶ意欲とともに、自ら課題を見つけ、自ら解を求める力である。だが、大学の一般入試は、これまで教科の知識の獲得度が合否の基準になってきた。富士市立高校の課題解決型学習は、大学に入学してからの学習には大きな意味を持つが、大学へ入学する時点においてそれだけで有効とは言い切れない。探究学習に対する教員の懐疑的な見方も、ここに由来する。これでは受験を突破できないとして、もっと知識重視の教育を求める教員がいることも当然であろう。

高校でのこうした葛藤は、高校の学習をどのように評価するか、それを入学者選抜においてどのように測定するか、さらには大学の授業をどのように行うかといった、大学側に課せられた課題でもある。

(吉田 文 早稲田大学教授)